

# 研究成果報告書

2020年 8月 31日

## 1. 所属・職・氏名 等

文学部 国文学科 非常勤講師 (2020年3月31日まで 同 准教授)

田口麻奈

## 2. 研究課題(テーマ)名

「鮎川信夫と戦後詩をめぐる基礎研究および国際的視野への接続」

## 3. 研究期間

2019年4月1日～2020年3月31日

## 4. 利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金

500,000円

## 5. 研究の概要

日本国家の再建に向けて様々な思想が渦巻いていた戦後という時代に、〈詩的言語〉がいかに日本社会という共同体の構想に関わっていたかを解明することを目指す。そのため、「荒地」グループを中心とした戦後詩の第一次資料の整備と公共化を進め、なおかつ、その成果を国内の学術領域に限らず広く発信することが本研究の主眼である。これらの作業は、詩という領域を取り落としがちな日本の戦後文学・戦後思想の全体像の刷新に繋がるとともに、社会に向き合う姿勢を次第になくしていった現代の詩の位置を相対化し、その可能性を考えるという、すぐれて今日的な課題に繋がるはずである。

## 6. 研究成果等

前年度に出版した拙著「〈空白〉の根底——鮎川信夫と日本戦後詩」(思潮社、2019年2月)への反応が「図書新聞」や「週刊読書人」等の書評紙上で寄せられるなど、多くの研究者や文芸批評家との研究交流が生じたことで様々な示唆を得ることができた。10月19日には拙著の書評会が開催され(於・東京大学駒場キャンパス)、書評者の逆井聡人氏(東京外国語大学講師)、ディスカッサントの藤井貞和氏(東京大学名誉教授)、司会の村上克尚氏(東京大学准教授)らとともに、拙著の課題と問題点について議論した。議論の内容は未公開だが、今後の研究に発展的に反映させることができる展望を得た。

また、岐阜県郡上市が主催する「郡上学歴史文化講座」の一環として、鮎川信夫に関する講演およびパネルディスカッションを行った(11月16日、於・郡上市総合文化センター)。これまでの研究内容に加えて、郡上市という土地柄との関連性を重視した視座から知見を提示した。パネリストの原義典氏(詩人・岐阜県在住)、司会の井藤一樹氏(郡上市図書館協

議会会長)らと、今後の郡上地域の文化発展および一般読者層における鮎川信夫享受の可能性について生産的な意見交換を行った。

なお 2019 年度は、申請者の継続的な課題であった「反戦平和のための詩歌原稿展」(1952～1953 年、於・姫路市)の展示資料のデジタル複写を含めた整理・保全を完了することが出来た。検証後の資料は、公益財団法人・日本近代文学館に寄贈し、ヴィジュアル資料集として制作したデータは印刷製本の上、各図書館や所蔵機関に献呈した。これにより、戦後詩の第一次資料の公共化という重要な課題について大きな成果をあげることが出来た。また、資料整理と並行して書き進めていた論考「IOI 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証」を、研究協力を仰いでいた逆井聡人氏(前掲)との共著で本学の大学院紀要に発表した。なお交付申請時に予定していた高野喜久雄・杉本春生らの調査は、社会情勢の変化により 2 月～3 月の出張が制限されたことと、上記の印刷製本費が嵩んだことで十分に遂行できなかったが、年間を通じた資料蒐集により一部、達成した。これらは引き続きの研究課題としたい。

また 2019 年度は、1950 年代の有力詩誌の一つである『現代詩』復刻の刊行に携わっており、解題として、50 年代の核技術をめぐる詩壇内外の議論を考察した「「死の灰詩集」論争と戦後詩における〈近代〉批判の布置」を執筆した。50 年代の核技術をめぐる議論は当時の世界的課題であるとともに、現在も多方面から関心を集める領域であり、今後の戦後詩研究の国際化に向けて歩を進めた。解題を含めた復刻詩誌は 2020 年 5 月に三人社より刊行完了した。

## 7. 研究の実績(論文・発表 等)

(招待講演、シンポジウム)

郡上学歴史文化講座〈鮎川信夫 人と作品〉

講演「〈空白〉を引き受けることば——鮎川信夫の現代詩」

(論文)

「IOI 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証」『都留文科大学大学院紀要』第 24 集(2020 年 3 月)

(資料集)

『IOI 同盟主催 街頭ハガキ展・反戦平和のための詩歌原稿展 資料集』(2020 年 3 月)

(共編著)

『現代詩』復刻版(三人社)解題「「死の灰詩集」論争と戦後詩における〈近代〉批判の布置」(2020 年 5 月)